

## 「打ち明ける」 ——リプロダクションの構築主義的ライフストーリー・インタビュー——

白井 千晶

社会学における質的調査としてのインタビューは、どのようなプロセスによって生み出され、どのような特徴があり、どのような産物、効果があるのだろうか。あるいは、何が生み出されないのだろうか。本稿では「打ち明けられた」語りを通して、語りの動機、文脈、相互作用のありようを描き出し、質的調査の特長ともつべき分析視角を検討したい。

### 1. 社会学の質的研究におけるインタビューとは

面接して対面的に聞き取ることをインタビュー、面接といい、人が口頭で語ることを聞き取ったもの、語ったものは、語り、ナラティブという。語りもナラティブも、物語 (story) の含意がある。人が自身の生活や人生、経験したことを語ったものは、生活史、生活記録、ライフヒストリー、ライフストーリーと呼ばれる。

生活史、生活記録、ライフヒストリー、ライフストーリーをデータとして用いる社会学の質的研究は、3つのアプローチにまとめられる (桜井 2002)。(1) 実証主義的アプローチ。人は社会的現実を語るインフォーマントと認識され、その語りは、客観的な資料として集合的に扱われる。シカゴ学派が実施してきた調査研究はこれに当たる。(2) 解釈的客観主義アプローチ。このアプローチも客観的なデータとして認識しているが、分析方法に違いがあり、データの収集過程で分析・解釈しながら、「飽和」に至るまで新たなデータを追加し、社会的現実を帰納的に一般化する。「エスノ社会学的パースペクティブ」から解釈的客観主義アプローチを展開したベルトーは、観察される相互行為の根底にある論理を理解して、主観的な意味や間主観的な意味を捉えてはじめて、社会的な意味に接近できるとした (Bertaux 1997=2003: 48)。(3) 対話的構築主義アプローチ。語り手は主観的な物語として経験や人生を語り、さらに聞き手によって構築される語り異なる。語りは聞き手と語り手の相互作用的な対話の過程で共同的に構築されるからだ。聞き手と語り手双方の状況、文脈、関係性、関心、解釈、意味づけ、反応によって、物語が生成されていくと考えられる。

筆者は共同研究や個人研究で、いずれのアプローチにも関わってきた。本稿では、対話的構築主義アプローチから、語りを使用する社会学的研究について考察する。対話的構築主義アプローチでは、調査者は単に被調査者の情報を観察し書き留めているのではなく、語りに参加し、介入していて、語りの生成において「アクティブ」な役割を果たしていることを前提にしている (Holstein et al. 1995; 中野 1995)。そのように構築的に生み出された語りを研究者は自らの文脈において解釈、構成しているのであり、それらすべてを研究の前提として時に分析対象にしたり、記述する必要がある。

筆者個人について言うと、これまで研究してきたリプロダクション（reproduction: 不妊、妊娠、人工妊娠中絶、避妊、出産、哺育など、生殖、産み育てと人口の再生産に関わる領域）に出会ったのは、大学4年生の時に読んだ『ある近代産婆の物語』（西川麦子、当時は自費出版の緑の館として刊行）がきっかけだった。西川は主人公の能登の産婆「竹島みい」の行為、業務、生活、志向、価値観や、村のリプロダクションのありようが、どのように社会や制度と関連しているか、プロセスのダイナミズムを描き出した（西川 1989=1997）。文化人類学研究者の西川は、構築主義的ライフストーリーとかアクティブ・インタビューという用語は用いなかったけれども、竹島のストーリーテリングを西川が触発して、竹島自身が記録を整理したり、自伝をまとめたりして、物語の生成に参加していく過程をも描き出していて、筆者はその作品としての面白さに惹きこまれた。

その後、筆者がインタビューしてきた対象は、明治、大正、昭和初期生まれの（主に開業した）産婆・助産婦、不妊の経験者、卵子や精子の提供、代理出産など第三者が関わる生殖技術で親になった人／なろうか考えている人、里親や養親、養育される子どもの立場で社会的養護（里親、養子縁組、施設）を経験したり虐待を経験した人、自らの子を養子として託した／託そうか考えている女性（birth mother、生みの親、生母）などである（共同研究プロジェクトを除く）。直感的な感覚であるが、産婆・助産婦の語りは、多くの場合、「定型化されたストーリーテリング」だった。おそらく何度か同じ話を人前で話したことがあるのだろう、エピソードの起承転結に迷いがなく、よどみなく一気に語られた。一方で産婆・助産婦以外のインタビューは「非定型のストーリーテリング」であることが多く、言葉や表現に迷ったり、矛盾したり、前後関係が思い出せなかったり、泣いたり取り乱したりと感情が表出し、話してほっとしたりすることもあった。本稿では非定型のストーリーテリングのうち、卵子提供によって母になった人と、子どもを養子に託した／託そうか迷っている生母の語りに絞って、語りの文脈と生成される物語について検討しよう。

## 2. 語りの文脈と生成される物語——「語りにくい語り」を語りたい

### (1) 卵子提供のレシピエントのライフストーリー

不妊当事者へのインタビューを用いた考察は、白井（2012）として記したが、特に卵子提供に関するインタビューは、白井（2015, 2016, 2017c, 2017d）にまとめた。本稿では、対話的構築主義的ライフストーリーの視点から語りが生成される文脈を検討するのに好例と考えられるAさん、Bさん2名を事例に考えたい。

#### Aさんのプロフィール

40代後半のときにアジアで卵子提供を受けた。何度移植しても妊娠せず、事業者に代理出産にしたほうがよいといわれる。数回、代理母に移植したが、妊娠に至っていない。子どもを育てることを切望しており、養子を迎えたくて様々な方法を模索しているが、50

代前半であるため、難しいのではないかと考えている。

筆者がAさんと出会ったきっかけは、生殖技術の実態を批判的に取り上げる記者から「話を聞いてあげてほしい」と紹介されたことに始まる。記者がAさんの取材をしたのだが、Aさんは養子を迎えることを望んでおり、筆者が情報提供できるのではないかと考えてのことだった。

Aさんは、不妊治療の経緯や、「夫は子どもが好きなのに子どもがいないからとても辛そう」と卵子提供を受けることを決意したこと、夫との話し合い、事業者とのやり取りや、代理出産を決めた経緯、子どもへの思いや、養子を迎えたいという現在の心境を筆者に語った。

夫婦ともに養子を迎える気持ちがあったのだが、夫婦の年齢が高くて迎えることができないと考え、非血縁の子どもを迎える気持ちが夫婦ともあるならば、卵子提供を試みようと考えたのだという。「自分のお腹で育てた子どもがほしい」という気持ちが強かったそうだが、事業者に代理出産の方が、妊娠・出産できる可能性が高いのではないかと言われ、自身への何度かの受精卵の移植のあと、代理母に移植することに切り替えた。代理出産事業者と契約して「プログラム」が進むと「期待が高まり」、妊娠しないと「落胆し」、途中で降りることが難しくなった一方、事業者や医師、病院の不確かで商業主義的な対応を知り、苛立ちを募らせたという。

代理母が何度か受精卵の移植をしても妊娠しなかったときに、残りの受精卵を再度調べてもらったら、すべて染色体異常だった。検査したはずなのに、これまで移植した受精卵もすべて異常だったのではないかと考えている。最初の検査は医療ミスだったのではないかと、もしかしたら、何度も移植して代金を支払わせるために染色体異常とわかっていて移植したのではないかと疑念をもっている。筆者とのインタビューと並行して、事業者、施術医師、当該国政府の消費者相談に連絡を取って調査を依頼し、「泣き寝入りしない」と語った。Aさんは筆者とのインタビューで、相対的に年齢が高い場合の養子縁組の可能性を模索すると同時に、養子縁組を迎えたいという気持ちの揺らぎ、代理出産に関わった事業者や医師への悔しさを語った。

#### Bさんのプロフィール

40代後半、アメリカで卵子の提供を受けて、子どもが1人いる。夫は子どもに出生の経緯を絶対に知られてはならないと思っているが、自身は知れてしまった時にはどうしたらいいのか、子どもにためには何がいいのか、と悩んでいる。凍結受精卵があり、第2子を望んでいるが、夫が反対している。

Bさんは事業者で紹介されて筆者に連絡した。子どもに出生の経緯を伝えること(テリング)、子どもに知れた場合の対応について悩んでいたが、誰にも話していないし、同じ立場の知り合いもいないので、事業者に相談していたところ、筆者を紹介されたという。

Bさんは「夫の子が授かれるという期待とすぎる気持ち」で卵子提供を決めて、出産に至ったと話してくれた。夫は、出生の経緯は「知らせてはいけないし、本人に気づかせてはならない」と考えているが、Bさんは「気づいてしまうことはある」から、考え準備しておきたいと思っている。

Bさんは同じ立場の人が交流する場で語るうちに、第2子がほしいという気持ちが明確になっていった。夫は「子どもが二人になると、出自を知るリスクがさらに高まる」と「子どもの将来を心配して」猛反対したが、Bさんは筆者に紹介された、精子提供で生まれた人が書いた書籍を読み、「告知をすべきではないだろうかと考えるように」なり、「告知をするならなおさらきょうだいがいたほうがいいという気持ちが強くなった」という。一方で、「親の身勝手、エゴではないか」と悩む気持ちもあり、逡巡を語ってくれた。

Bさんの希望で、卵子提供で複数の子どもをもった女性と個別に話す場所を設け、Bさんが語り、気持ちを整理できる機会を作った。また、生まれた立場からの書籍、告知に関する書籍や経験談の情報を求められ、提示したところ、非常に真剣に読み進めているとのことだった。

以上、Aさん、Bさん、二人のプロセスや筆者とのかかわり、心情について述べた。明らかに、筆者はAさん、Bさんのライフストーリーをただ「傾聴する」のではない。Aさんには、求めに応じて、高年齢での養子縁組について知りうる情報を伝え、同じく求めに応じて、メディアの取材を紹介した。彼女は様々なトラブルに対し、事業者や医師の瑕疵があったのではないかと考えているが、筆者は卵子提供のプロセスに対して医学的見地から判断する知識は持ち合わせていない。筆者は卵子提供や代理出産について、肯定も否定もしなかったが、「心情を理解したい」という姿勢であることは伝わっていたと思われる。インタビューを継続する中で、インタビューがAさんを傷つけないか気になり、その懸念をAさんに改めて投げかけたりした。Aさんにとってインタビューの場は、情報源であり、当該分野をよく知る人が話を聞く場であり、事業者や医師、相手国の政府や法制度への問題提起にアクセスできるリソースでもあっただろう。互いにそれを了解の上で、インタビューが重ねられたように思う。

Bさんには、求めに応じて、テリングの動向や資料を示した。筆者自身はテリングの望ましさについて提示はしておらず、カウンセリングも助言もしない。当事者の交流会にはテリングする意思がない人もいた。しかしだからといって筆者のかかわりが「中立的」であったとは限らず、Bさんにとっては、告知について知りたい情報が与えられることが告知の望ましさを強化し、「介入的」であったとも言える。

## (2) 子どもを養子に託した／託そうか迷っている生母のライフストーリー

次に、事情があつて自らの子を養子に託した生母（生みの親、バースマザー）、あるいは託そうか迷っている女性のライフヒストリーを紹介する。養子に託した生母、養子に託そうか迷っている女性へのインタビューを用いた考察は、白井（2014, 2017a, 2017b）に詳細を記

している。ここでは、前節と同様に、対話的構築主義的ライフストーリーの視点から語りが生み出される文脈を検討するのに好例と考えられるCさん、Dさん2名を事例に考えたい。

#### Cさんのプロフィール

小学生のときに両親が離婚。母親が家を出る。父が再婚し、継母のマルトリートメントが始まる。21歳で家出。遠く離れた都会に出て販売員などをしたが、その後、性風俗でも働く。交際していた同棲相手との子を23歳で妊娠、妊娠3ヶ月の時に交際相手の借金がわかり、問い詰めたところ帰ってこなくなる。生活が立ち行かなくなり、妊娠5ヶ月の時に養子縁組支援団体に相談、シェルターに入居する。出産後、5ヶ月間、シェルターから仕事に通い、その後、自立した。

母親がマルトリートメントをし、父親も彼女を守ってくれなかったため、Cさんにとって当時お腹の胎児は「初めてできた家族」（養子縁組機関の支援者談）だった。「ちっちゃいからちびって呼んでるんですけど、ちびが苦しいときは、ママの子宮もっていいからねって夜寝る前に何回も言ったら、逆子が戻った」（妊娠7ヶ月時）と、もう産めなくなるとしても子どもの健康を願うほど胎児に愛着を感じていた。

筆者が最初にCさんのインタビューをしたのはCさんが妊娠5ヶ月の時に、産後半年まで続いた。彼女の支援者には出産経験がある人がいなかったから、筆者と陣痛や出産について話をしたり、産後の就職活動や履歴書の書き方について情報提供したり、支援者にはいろいろ養子縁組についての思いを聞いたりした。彼女にとって筆者は、親でも養子縁組支援者でもない関わりやすさがあったかもしれない。

彼女の胎児への強い愛着に触れるにつれ、彼女が自らの子を特別養子として託すという重大な決断をしようとしている時に、筆者がインタビューとしてただ傾聴することの危険と罪悪感を感じた（特別養子縁組は実方と子どもの親族関係が終了し、縁組成立後は離縁することができない）。介入的ではあるが、シングルマザーとして育てる場合の社会的資源について彼女に提示し、養子縁組の意思はまだ撤回できる時期であることを伝えた。Cさんが選択を変更することはなかったが、聞き手が語り手の人生に関わる選択に影響を与える可能性もあるだろう。聞き手がカウンセリングのように非指示的であったとしても、影響を与える可能性を内包している。

#### Dさんのプロフィール

生まれた子どもがダウン症だった。夫が鬱状態になり、自身も障害がある子を産んだ罪悪感にさいなまれ、自分たちでは子どもを幸せにできないと、養子に託すことを考えるようになる。経済的にも、自立できない子を長期的に支えることは難しい。養子縁組機関に連絡をとったが、数ヶ月育て、夫の受け入れが徐々によくなって、育てられるのではないかとその思いに至った。

Dさんとは、産後まもなくの、夫婦ともに「暗闇の中にいた」時に、ダウン症の子どもの養子縁組に関して情報提供するために紹介され、気持ちが整理できるように情報を提供した。折に触れてやりとりするうちに、育児の先輩の心情になって共感したり、筆者自身の妊娠・出産・育児経験を伝えたりした。心理的負担を考慮して、インタビューを実施したのは自ら養育する意思を固めてからである。振り返って今に至る心情や状況を語ってもらった。

このように、養子に託そうとする女性の語りにおいても、語り手は主体的に語りに加わり、語り手と聞き手は代替不可能な固有の関係性をもって相互作用していた。妊娠中でまだ養子縁組していない、養子に託すか迷っている、などプロセスが進行中であるからこそ、語り手の条件を満たした相手に語りたいのであるが、それゆえに相互作用は語り手のその後の意思決定やプロセスに影響を与える可能性がある。

### (3) 「打ち明ける」——「語りにくい語り」を語りたい

現代日本社会において、一般的に、他の人の卵子で妊娠・出産したこと（しようとしたこと）は、「誰彼にでも話せることではない」と感じる当事者が多いのではないかと。生殖技術の使用に関する法律がなく、合法でも違法でもないため、日本で施術する病医院は数施設しかなく、「グレー」「アンダーグラウンド」との認識があるからである（ただし各種意識調査では過半が許容している）。海外に渡航する場合は事業者等を介して多額の費用を支払うことが多く、生命倫理・道徳的な観点からも議論になっている。

筆者が卵子提供で親になった人に対して実施したアンケート調査では、親きょうだいや友人に事実を伝えておらず、出産病院だけに伝えた人は27.3%、出産病院を含め誰にも伝えていない人は27.3%と、半数以上の人々が夫以外、誰にも話したことがない状態で筆者のインタビューに至っている。

養子縁組に託す経験や意思についても、一般的には、「語りにくい」ことだろう。インタビューした別の人は「この子を出産したせいで友人を失った」と、理解されなかったことを口惜しく語ったし、レイプや風俗など妊娠の経緯に触れざるを得ないため「語りにくい」こともある。「命の大切さ」「子ども優先」の規範を当事者も内面化しているため、Cさんのように、「愛」ゆえに養子に託し、「愛」ゆえに喪失感と自責の念を感じている（白井 2017a, 2017b）。Dさんは配偶者も仕事もあって、上の子も育てている。子どもに染色体異常による障害があるから育てられない、「かわいいと思えない」ことについて、社会的にスティグマを与えられる行為だろうと予想しているため、「誰彼にでも話せることではない」と感じていただろう。

社会的にスティグマを与えられると予想して語りづらいことは、他にもあるだろう。リプロダクション領域に限っても、人工妊娠中絶、子ども虐待、性癖、性加害、近親姦姦などは、違法・触法でなくても、規範上、一般的に負のサンクションがあり、語りづらいことが予想される。

しかし、「語りにくい」ことだからこそ、人を選んで「語りたい」こともあるだろう<sup>1</sup>。誰かに向かって語ることは、単に言語化することを超えて、共感—承認という相互作用である。聞く側も、理解し、表出し、語られるという「聞くという行為」をおこなっている。ナラティブ・セラピーのように、語ること自体がセラピーであるとも言われているが、さらに、「極めて主観的なものに過ぎない「現われ」を、他者との間に投じる過程によって、初めて自他共に、リアリティが構築される」(ハンナ・アーレント) のであり(山田 2016: 2)、アイデンティティは「個人が物語を語るという形式によって算出され、語りと共に更新され続ける」(山田 2016: 2) (Gergen and Gergen 1988; Plummer 1995=1998; 野口 2005)。従って、「とりわけ生き難い生を生きる者が、不完全な方法とは知りつつも、傷ついた己を再生させるために経験を言語化し、そうすることが有効に働いている」(山田 2016: 2) のである。

プラマーはさらに、ストーリーを語る権力は政治過程の一部であると論じた(Plummer, 1995=1998: 53)。例えばレイブ・ストーリーを語ることは、「話せない」から「サイババー」へと開いていくことになる。秘密と沈黙の私的な世界から公的世界に持ち込まれるのである(Plummer, 1995=1998: 115)。

このように、「語りにくい」ことを「語りたい」という文脈で先の語りは生成されており、誰にも話さなかったことを「打ち明ける」行為が相互作用的に構築されているといえるだろう。Aさんは、バッシングで傷つくことをできるだけ排除できるようコントロールして語る環境を作りながら打ち明ける行為の中で、代理出産での疑念について「泣き寝入りしない」という気持ちを確立していくと同時に、自身の条件にあった養子縁組に関する情報を得たり心情を整理したりした。Bさんは卵子提供で二人目の子どもを妊娠・出産する希望を打ち明けることで同じ立場の人に出会い、子どもへのテリングの情報を求める中で志向を変化させていった。Cさんは、妊娠から養子に託すプロセスにおいて、支援者でも当事者でもない第三者にあふれる気持ちを吐露した。Dさんは障害がある子が生まれて「暗闇にいるとき」に、養子に託す選択について情報を得たり、心情を言語化したりした<sup>2</sup>。

### 3. 「打ち明ける」語りにおいて構築されないライフストーリー

しかし、すべてが「打ち明け」られるわけではない。

例えば、Aさんが打ち明けたのは、事業者や医師に疑念を抱いてクレーム申し立てをしたという動機があったのだが、筆者が紹介した別の記者に対しては、「代理出産を責めているようで、とても傷ついた」と連絡を絶っている。メディアの取材を受けるのは大変緊張し、卵子提供や代理出産を依頼したことを何度も語るのは心理的負担があるが、事業者や医師

<sup>1</sup> 協力者募集は、筆者からリクルートすることは物理的に不可能で、サイトでの募集、医療者からの紹介(依頼)、メディアからの紹介、同じ立場の人からの紹介、などである。筆者は継続的なインタビューの中で、当事者が匿名で交流できる場の必要を感じてそのような場を設けたため、交流会情報からインタビューに至ることもある。

<sup>2</sup> 先述のようにインタビュー依頼は養子に託さない方向が定まり、精神的に落ち着いてからおこなった。

の取材をしてほしいと考えて積極的に取材を受けている。しかし同時に、「お金にものを言わせてアジア女性の卵子を買い、代理出産させる日本人」という記事を書きたいのではないかと懸念している。「代理出産を選択した時点で批判があることは承知していた」が、「軽蔑された」と感じ、「代理出産を下に見ている」発言をメディアが引き出そうとしていたことに「愕然とした」という。

彼女は、自らの動機に基づいて語る場を創出し、選んでいるが、自身がどう見られるかも予想しており、社会規範を内面化して自身が深く傷ついているため、さらに傷つく機会は注意深く排除しようとしている。そうすることによって、「代理出産を責める」「倫理的・道徳的問題を掘り下げる」語りの構築は、意図的になされないことになる。

特定の事実が戦略的に、あるいは心理的抵抗から語られないこともある。不妊の人、卵子提供を受けようとしている人、子を養子として託そうとしている人が、かつての人工妊娠中絶の経験を語らないことはしばしばあった。その経験が当該行為の決定に影響していても、である。卵子提供を検討中である人が、代理出産も検討中だったのに語らなかったこともあるし、養子として託そうとする人が最後までなぜ妊娠したか身に覚えがないと答えることもある<sup>3</sup>。

近年では、「話さないこと」に対し、より積極的な意味を付与しているように思われる。例えば、人前で自分を語るさいに「Strategic Sharing（戦略的な共有・開示）」の理念や方法が学ばれたり<sup>4</sup>、開かれた対話による精神療法である「オープンダイアログ」では、「話されないことについて話さない」<sup>5</sup>と述べられている。

意図や意思をもって語らないだけでなく、焦点となっている事柄（例えば卵子提供、代理出産、養子縁組、子どもの障害）に関連する出来事や行為、考えについては語るが、それに関係ないと自身が考えることについては尋ねられなければ語らないこともまた、4人の語りに共通している（そしておそらくインタビュー全般に共通している）。例えば、どんな子ども時代だったか、配偶者や交際相手との出会いは何だったか、どんな仕事をしているか、どんな家族か、ということは、焦点と関連した時・部分しか語らないから、語りは包括的なライフストーリーではない。構築主義的なアプローチでは、語り手の主体的で主観的な語り、聞き手との相互作用、相互作用に影響を与える二人の動機、目的、文脈、解釈、反応、語りを解釈・分析する研究者を分析する必要があるのだが、量的調査における欠損データの分析やデータの偏りの分析のように、語られないこと、つまり「構築されないライフストーリー」を推測し、分析する必要もあるかもしれない。

<sup>3</sup> ただし、あまりにも心身に侵襲的であるから乖離していることもあるし、睡眠薬などで昏睡させられる事件性のある妊娠もある。

<sup>4</sup> 自身のライフストーリーを有意味に、効果的に、安全に語る方法

([http://www.hunter.cuny.edu/socwork/nrcfcpp/info\\_services/download/StrategicSharing.pdf](http://www.hunter.cuny.edu/socwork/nrcfcpp/info_services/download/StrategicSharing.pdf))。例えばセクシュアル・マイノリティ、虐待を受け社会的養護のもとで暮らした経験などを、語ることで自身を傷つけることなく、聴衆に意図が伝わるように戦略的に語ることなどがそうである。

<sup>5</sup> オープンダイアログの創始者であるトム・アンデルセンとヤーコ・セイクラのインタビュー映像のタイトル、『オープンな会話：話されないことについて話さない』より。



「語らないこと」のみならず、「語れないこと」もある。山田 (2016) は、DV や子ども虐待などの「語り得ない」心的外傷について論じたさい、心的外傷によって考えや言及が抑圧されることは、他者が聞くことの困難をもたらしているが (山田 2016 : 7)、聞かれ、承認されなかったことが受傷者の認識を歪め、さらに語りを妨げると指摘した。鷺田 (2012) は東日本大震災の被災についての著作で、「人生というのは、ストーリーとしてのアイデンティティをじぶんに向けてたえず語りつづけ、語りなおしていくプロセス」だが、甚大な災害はそれまでのストーリーを壊し、誰かと語り合っただけでストーリーを形作る関係も断ち切ったと述べた (鷺田 2012 : 27-31)。

「自らを語り得ぬ人々」もいる。川 (2013) は、自らを語り得ぬ人びとは、重度の障害者や認知症の人というより、トラウマに近すぎて語れない人、自らの経験や困難を社会に向けて明らかにすることができない、不可視化された人々だという (川 2013 : 89)。しかし近年、従来語り得ぬと考えられてきた人びとが語りを公にするようになった。例えば、認知症の本人による語り (DIPEXJapan<sup>6</sup>) や書籍の出版、発達障害、知的障害、精神障害の人の語りや本人による出版 (例えば山本 2016、村田 2017、浦河べてるの家 2002) などである。

かつて民衆史、女性史が庶民や女性の資料に注目したのは、声のない人、文字のない人から歴史を再構築しようという試みだった。オーラルヒストリー (口述史) もまた、名前のない人、「語られない人」を語ろうとした (例えば中野 1995)。

桜井は、『インタビューの社会学』で、「語らせることと語られないこと」を論じたが (桜井 2002)、ファシズム体制について人びとが語らず「沈黙」したことを例に、その出来事が生活にとって影響がないか、トラウマ的体験だから語れないかということのほか、研究者の聞く耳を持たない構えが妨げになっていることも指摘した。ただ調査者の聴き方の能力が低い場合もあり (例えば語りの継続を遮るような行為 (桜井 2002 : 265-266)、「語らないこと」には、聞き手側の要因もある。一方で、「語りたくないと思っていたことをつい語ってしまうこと」もある (桜井 2002 : 269)。

このように、「打ち明けること」は、(内容が) 語りにくいこと、語りにくいからこそ語りたいこと、(内容が) 語れないこと、語らないこと、語れない人、語られない人、聞こうとすること、語りを促すこととの相対的な関係の中で、語り手個人と聞き手個人が相互作用しながら共同的に構築した一回性のストーリー (物語) だといえるだろう。

## 文献

Bertaux, Daniel, 1997 *Les récits de vie. Perspective ethnosociologique*, Nathan Université. (ベルトー・ダニエル、小林多寿子訳、2003、『ライフストーリー：エスノ社会学的パースペクティブ』ミネルヴァ書房) .

<sup>6</sup> DIPEXJapan はウェブサイト (<https://www.dipex-j.org/>) で「健康と病の語り」のビデオクリップや音声を公開している。認知症の語り、乳がんの語り、前立腺がんの語り、大腸がん検診の語り、臨床試験・治療の語りがアップされているが、認知症の語りでは、50代から80代の認知症本人12名の語りが動画で閲覧できる (2018年3月現在)。

- Gergen, K. J. and Gergen, M.M. 1988 Narrative and the Self as Relationship, in L. Berkowitz ed., *Advances in Experimental Social Psychology*, 21, Academic Press.
- Holstein, James A. and Gubrium, Jaber F. 1995, *The active Interview*, SAGE. (ホルスタイン・ジェイムズ他、山田富秋他訳、2004、『アクティブ・インタビュー：相互行為としての社会調査』せりか書房)。
- 川英友、2013、「自らを語り得ぬ人々」からの「当事者概念」の考察『静岡英和学院大学紀要』、11、85-94.
- 中野卓、1977、『口述の生活史：或る女の愛と呪いの日本近代』御茶の水書房。
- 中野卓・桜井厚編、1995、『ライフストーリーの社会学』弘文堂。
- 杉田穂子、2017、『知的障害のある人のライフストーリーの語りからみた障害の自己認識』現代書館。
- 西川麦子、1989=1997、『ある近代産婆の物語：能登・竹島みいの語りより』（増訂版）、桂書房。
- 野口裕二、2005、『ナラティブの臨床社会学』勁草書房。
- Plummer, Kenneth, 1995, *Telling Sexual Stories : Power, Change and Social Worlds*, Routledge (桜井厚・好井裕明他訳、1998、『セクシュアル・ストーリーの時代：語りのポリティクス』新曜社)。
- 桜井厚、2002、『インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方』せりか書房。
- 白井千晶、2012、『不妊を語る：19人のライフストーリー』海鳴社。
- 、2014、「妊娠葛藤・子の養育困難にある女性の養子に出す意思決定プロセスと公的福祉：特別養子縁組で子を託す女性の語りから」『和光大学現代人間学部紀要』7、55-75.
- 、2015、「卵子の提供を受けて母親になった女性の妊娠以降の経験について：当事者インタビュー調査より」『アジア太平洋レビュー』12、51-68.
- 、2016、「卵子提供をめぐる当事者の意思決定と子の福祉」『文化と哲学』33、1-29.
- 、2017a、「女性の「責任」：「いのちの大切さ」と「子どもの幸せ」の時代に」、松岡悦子編、『子どもを産む・家族をつくる人類学：オルタナティブへの誘い』勉誠出版、97-127.
- 、2017b、「昭和初期と現代における養育困難な養子縁組：籍から愛へ」、岩上真珠・池岡義孝・大久保孝治編著『変容する社会と社会学：家族・ライフコース・地域社会』学文社、75-100.
- 、2017c、「卵子の提供を受けて母親になるということ：高齢妊娠女性への聞き取り調査から」日本学術会議 SCJ フォーラム編『学術の動向』、22(8)、30-34.
- 、2017d、「特集総説 リプロダクションと保健医療：卵子提供を事例に」『保健医療社会学論集』28(1)、2-11.
- 浦河べてるの家、2002、『べてるの家の「非」援助論：そのままがいいと思えるための25章』医学書院。
- 山田瑞紀、2016、「語りから聞かれること：心的外傷の語り得なさをめぐって」、米村千代編『流動化する社会と紐帯（人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書 第301集）』、2-17.
- 山本智子、2016、『発達障害がある人のナラティブを聴く：「あなた」の物語から学ぶ私たちのあり方』ミネルヴァ書房。
- 鷲田清一、2012、『語りきれないこと：危機と傷みの哲学』角川学芸出版。

(しらいちあき・静岡大学)